

けでも数百万円の費用を要し、残念ながら、形ばかりの柵を作るより仕方なかったのである。

工事費総額は、正規に見積れば二四〇〜二五〇万円ほどかかると見られ、三上誠三氏が土木工事（重機使用等）一切手助けしてくれ、柵の建設作業、空壕に橋を架ける作業などには秋元惣之進、小山内嘉一郎、木村治利、原田万治、須崎正敏、山中長三郎、舛甚頼壯、須崎寅雄、秋元清逸、山中正津の労力奉仕にて完成させた。

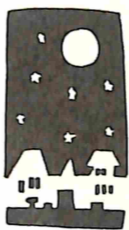
お城コは、大正年代まで秣場として部落共有で利用され、昭和に入ってから帝国在郷軍人会分会の手によって植林されたが、戦後は手入れする団体もなく、昭和二十六年十月所有権が村の製材業者へ移り、更に二十八年十月には隣村の製材業者の手に渡り、六十二年七月一日羽柴商事株式会社に売買された時点では、目星しい樹木は伐り尽くされていた。

現在は、土砂の販売のため堀削され、殆んど昔の形容がなくなりつつあるが、蝦夷館跡の空壕の保存、柵の復元、新しい小田川城の建造によって、またまた後世に語り云えられるであろう。

〓お城コ植林関係取材に鳴海勲、花田征義、秋元文四郎、木村

金利、秋元金五郎、鳴海彦一の各氏からお話を聞きました。〓

〓62頁対馬義二氏からの一文は、白川兼五郎氏から提供を受けました。〓



中柏木の野面から消えたもの 原田万治

空糸

秋の澄んだ日本晴の日に真白い糸が舞い降りてくる。その真白い糸を私達は空糸と呼んだ。空糸は午前十時頃から午後三時頃の間は無数の空糸が飛んでくる。それは真綿のようでもあるが、張力はなくプチ、プチと切れる。長いもので二十五センチから三十センチ、短いのは三センチぐらいで、無風状態か、微風のときで、だいたい時期は九月二十日頃から十月十日頃の間である。東風のときはまちがっても飛んでこない。よく晴れた日が三日続いて、空気が乾燥し、西風の微風が頬をなでる程度の静かな日には、その時期になると毎年飛んでくる。飛ぶというよりも舞うという言葉がピッタリで、詩情豊かな人であれば名文ができるにちがいない。

その原因は一説によると蜘蛛の糸が上昇気流によって舞い上がり、何らかの変化を遂げながらこちらまで飛んでくるというのだが、何か不思議でならない。蜘蛛の糸自体は白というよりも水みずしさの色あいで空糸の白さとは見た目には全然違うようだが、空糸を丸めて固く締めると本来の蜘蛛の糸の色に似てくる。

ともかく空糸は海の彼方から飛んでくるわけではないだろうし、西風の日でなければ現れない現象であれば、西郡のどこからか舞い上るとしか考えられない。

空糸の抛りどころはさておいて、空糸の飛んでる様子を小学生の頃は誰かが図画に書いたものだった。十数年前から、詩情をさそう空糸も環境が変わったのか目にするのができなくなった。

祖先誕生

佐和田（沢田）家の始祖 … 吉崎春雄



山城の国（京都）に佐和田の庄があり佐和田右エ門尉茂幸（佐和田城主）浄土真宗の開祖親鸞上人の教えに帰依し更に蓮如人の法弟でもあった。

茂幸は城一門の将来を引き石山本願寺におり織田信長に對しと自ら総指揮にあたり少しの劣勢を見せず戦い続けること数年、時の正親天皇の勅裁により天正八年三月和議が結ばれたが、織田の監視が厳しく茂幸は後の南台寺初台住職玉角兵衛等の計り秘かに石山を脱出、若狭湊（福井県）海路能登、佐渡ヶ島、土崎を経て天正十九年の頃鮎内（市浦村相内）に着陸、この間討手を逃れるためしばらく鈴木とも名乗り鮎内に着いてからは沢田と名乗り百姓となり一族はひたすら開拓に精魂をかたむけ遂次南進し薄市を経て金木、嘉瀬に定着したのは慶長元年の頃である。天正五年（一五七七年）織田信長が天下平定の名の下に築城した大坂城は石山本願寺跡である。

茂幸は名を茂左エ門と改め十八代茂太郎を経て現在に至る。沢田、鳴海、原田、内海、伊藤、土岐家は嘉瀬開発の元祖でもある。弘前市浄龍寺の過去帳に金木村の草分けの百姓として沢田、対馬、田

中等十三家を記されている。

吉崎家の始祖

新田義貞が上野国（栃木、茨城地方）より北条幕府討幕の先陣を切り立ち上った。

新田はニッタ、ニュータ、ニイタシンデンであり新田開発によってつけられた地名でもある上野国新田郡より起こった。

五十六代清和天皇の子孫源義家の三子義国が藤原実能との争いで下野（富山県石川県地方）に下りその後上野新田郡に来往）二子を生み長子義重は新田庄司 新田太郎）となり新田小次郎義貞の祖である。

次子義康は足利氏の祖となる。

清和天皇56代―源義家―新田義貞―維氏―維義―維則―維忠が吉崎氏を性とした。

義貞は各地を戦の末、藤島城（福井市超勝寺境内跡の近くの灯明寺）で最後をとげた。

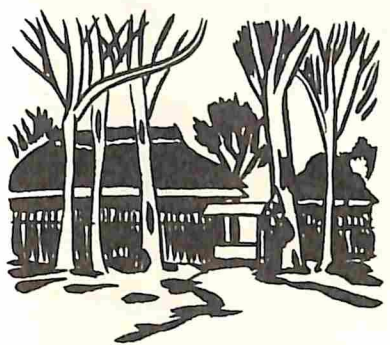
東北にもその子孫が多く後年八市南部十八代政義の母櫛引将監しんげんの娘で実父は新田盛政で武田氏と近い。

南台寺

慶長法名を林西坊とは、俗名で生玉角兵衛で、元和二年号を与えられた。

林西坊―西念―玄貞―浄可―浄玄(女)―左京、六世左京は浄玄が逝去するや八才で住持となり、一七八三年天明三年左京は飯詰村の法林寺へ見習いに行きます。

其の年もその翌年も大飢饉で南台寺も不幸にして堂宇はことごとく壊され、かすかに残った梵鐘は、左京養育費として法林寺に収めた。左京は天明四年法林寺で病死してしまつた。この時より南台寺は全くの廢寺のようになった。左京が早死したので、中村忠兵衛なる人、自分の娘オベンに弘前法願寺三男子行を婿にして、七世として南台寺を復興せしめた。檀家は今、三〇〇余軒あるとされる。



貯金、共済、米、肥料は農協へ

嘉瀬農業協同組合

金木町大字嘉瀬字雲雀野一八ノ一

電話(代)五三一―二〇六七

組合長理事 吉崎 忠直

参事 成田 一弘

外役職員一同

告ぐ!

◎ かたりべ第四集から第八集まで残部あります。

希望者はお申込み下さい。

◎ 同好の士を募集しています。

お問い合わせは、

ふるさとを探る会

会員名簿

顧問	外崎 三千男
会 長	木 立 民五郎
副会長	木 村 治 利
編集局長	原 田 万 治
会 員	山 中 正 津
〃	鳴 海 勲
〃	秋 元 幸之進
〃	小山内 嘉一郎
〃	須 崎 正 敏
〃	沢 田 政 孝
〃	山 中 長 三郎
〃	沢 田 薫
〃	秋 元 惣之進
〃	木 下 巽
〃	秋 元 清 逸

編集あとがき

▽本州最北端に位置する青森県は古代から化外の地であった。文献にはじめて登場するのは、斎明天皇の四ノ六(六五八―六六〇)で阿部あべ比羅夫ひらふの水軍が蝦夷征伐のため北上し、淳代むら(現能代)都加留(津軽)の郡領を設置し、有間浜で、蝦夷と交流したことが、日本書紀に記されている。この頃すでに、住民集団による文化の差があったにせよ、津軽でも、狩猟、漁労、そして一部水田耕作をふくんだ畑作農業をいとなんでいたものと思われる。

日本の文化の特性は、自然に対応し、水と緊密に結びついて発展してきた。米づくりによって、平野をつくり、山村をつくり、林業をささえ、森林を守ってきたのだ。水田が水をたくわえ、水の文化が生まれてきたのである。今、その米作りが、米の自由化問題によってやめねばならぬ状態になろうとしている。米作りは単に食糧確保ばかりでなく、国土の自然を二千年以上も育ててきたのである。その歴史が、一瞬にして作りかえられてよいものだろうか。農村に生きる我々にとって、それが現実となれば、悲しいできごとである。

(K)

▽九は苦につながるのか、第九集ほど苦労したものはない。何時もの事ながら、書斎を編集室に提供してくださって、編集の中心になってくれた木村会長には特に苦労をかけた。

▽原稿の締切日を何回も延ばしたが、結局は編集委員だけの執筆となった。会への新加入者もここ数年なく、かたりべのあとつぎについても対策が必要。▽かたりべの先達、顧問格の方々には、次の第十集にでっかく登場の筈。乞うご期待。

(山)

かたりべ第九集

発行 平成四年三月

発行所

嘉瀬ふるさとを探る会

発行者 木村 治利

編集人 山 中 正 津

印刷所

五所川原市一ツ谷

朝 日 印 刷

☎ 三四―三三二六

防護柵工事一式



有限会社 須崎建設

代表取締役 須崎悠悦

住所 金木町大字嘉瀬字端山崎202番地

TEL 0173(52)3571

FAX 0173(52)2303

～～身体障害者、高齢者に生きがいを～～

吉崎縫製

(有)サンモード金木

会長 吉崎正光

自宅 金木町大字嘉瀬字端山崎40
(TEL53-3291)

会社 金木町大字金木字芦野30-9
(TEL53-3286)



東北興産株式会社
建設資材の総合商社

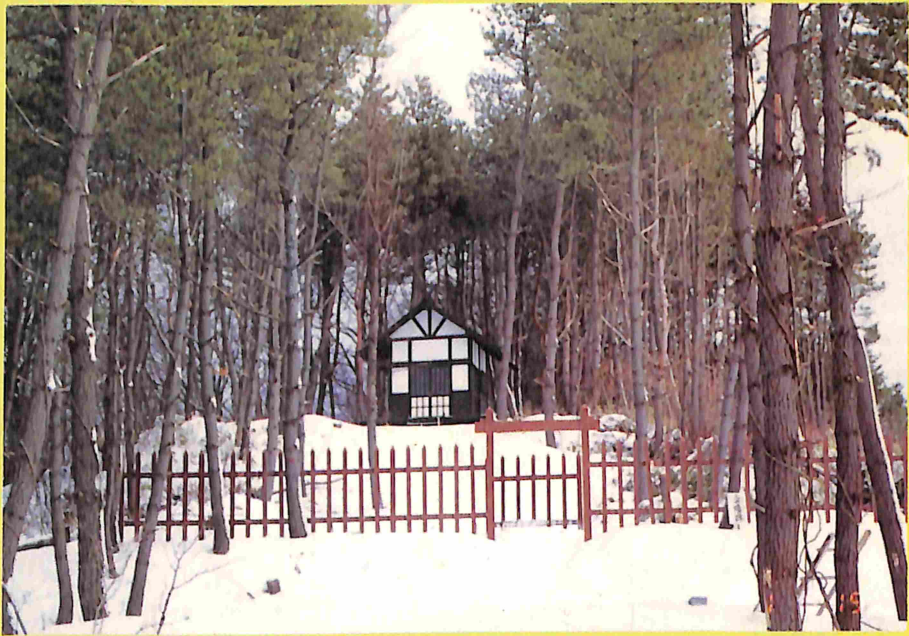
社主 三上誠三

本社 青森県北津軽郡金木町大字嘉瀬字上端山崎二五七
電話 (〇一七三) 五三一二六三三
FAX (〇一七三) 五三一二七五六
営業所 青森県北津軽郡金木町大字中柏木字釜石上一八一
電話 (〇一七三) 五三一二二七七
FAX (〇一七三) 五三一三六六三

阿部齒科院

院長 阿部 寿

五所川原市敷島町六四ノ二
電話 三五一一五四四



金木分館



1080016496